

# 谷田部とその周辺地域の現在と過去

班員：上山滉介 岡野勇太 鈴木颯子 迫屋景亮 入安ディリ 角田圭吾 及川智也

担当教員：松原康介 TA：渡邊智也

## 1. 動機

我々6班のテーマは「つくばの都市計画史」である。そこで一番初めに伊能忠敬によって作成された江戸時代の地図を見たところ、現在のつくば市のうち谷田部地域のみ地図に地名が書かれていた。そのため谷田部は歴史が深く、大きな道路がある栄えた都市であったのではないかと考えた。しかし、私たちが抱く谷田部のイメージは高齢化の進む小さな集落である。そこで実際にフィールドワークとして谷田部のまちを歩いてみたところ、歴史を感じられる建造物を目にすることができた一方で、現在は営業していない商店などが多数見受けられ、谷田部の歴史に興味を持った。

地図に地名が載るほど存在感のある地域であった谷田部が、賑わいに欠ける現状に至るまでにどのような変化があったのか。新旧地図の比較やフィールドワーク、インタビューなどを通して、新旧を比較しその因果関係を明らかにしていく。

## 2. 目的

谷田部の歴史に関する先行研究として「谷田部市街にはかつて多様な業種の多数の店舗が並び、駄馬を連れ荷車を曳く人々が行きかう「にぎわい」が存在したことが明らかになった。」（小口、高橋、上形、新宮、中川 2014 P96）とある。そこで我々は谷田部地域内の昔の地図と現在の地図を比較することで、土地利用の変化を明らかにすることを目的とする。

## 3. 調査方法

文献調査、新旧の地図の比較、フィールドワーク、インタビューを行う。現段階では、谷田部市内

のフィールドワーク、谷田部郷土資料館の見学などを行った。

## 4. フィールドワーク

### 4.1. 谷田部郷土資料館

関ヶ原の戦い以降、徳川氏に仕えた細川氏が谷田部に本城を建設し、谷田部藩主として統治にあたった。明治時代に入ると郡役所が谷田部町に置かれたため、長い間行政の中心としての役割を担った。

### 4.2. 谷田部

つくばエクスプレスみどりの駅周辺は幅員の広い新しい道路が多く、車の交通量が多かった。またカスミやドラッグストアなどのチェーン店や飲食店も多数見受けられた。道路沿いには新しい住宅が多く立ち並んでいた。

一方で県道19号を越えると町の雰囲気は大きく変わった。道路は細く曲がったものが多く、個人経営の商店が立ち並んでいたが、その大半は営業をしておらずシャッター商店街化が進んでいた。ゆえに人気は少なく、駅周辺と比較すると賑わいに欠けた。旧市役所への道は整備されており、目立っていた。

## 5. 谷田部の歴史・文献調査のまとめ

### 5.1. 谷田部市街地

谷田部市街地は旧谷田部町の中心であった場所とその周辺のことを指す。江戸時代には陣屋が存在し、明治期には筑波郡の役所が設置された。また交通の結節点として栄え街道が敷かれた歴史を持つ。大正期以降、農村部との交易が盛んであったころは多くの牛馬商が居住するとともに、中心地近くの商店街には多くの飲食店、商店、また映

画館などの娯楽施設も存在した。つくば市の合併がなされた際の市役所は谷田部に置かれ、様々な時代の移り変わりの中でも中心地として栄えた町である。

以下は谷田部に関連する出来事の年表である。

年	主な出来事
1945	農地改革 -農村としての
1955	谷田部町・小野川町・真瀬村・島名発展- 村・葛城村が合併し谷田部町となる
1958	建設基本計画書に工場誘致が登場 -急激な都市化
1963	筑波が研究学園都市に指定 の進行-
1973	用地買収終了 -高度経済成長
1980	筑波研究学園都市概成 期-
1981	谷田部インターチェンジ開通（柏- 谷田部） -新たな開発の
1985	国際科学技術博覧会 連続-
1987	つくば市発足 -商業機能の衰
2005	つくばエクスプレス開通（みどりの 退が進む-
2010	研究学園へとつくば市役所移転

図 1 谷田部の年表（筆者作成）

## 5.2. 土地利用と学園都市

つくば市全体としてもそうであるが元来、町の土地の多くを占めていたのは農地である。しかし時代の流れ、さらに異質ともいえる研究学園都市構想により土地利用は大きく変化した。

地図を見ると現在の谷田部市街地の土地利用ははっきりしているように見える。江戸時代に陣屋が設置されて以降、中心地であった場所には長い間様々な行政施設、都市機能が集約されてきた。そしてその周りを取り囲むように住区が存在し、谷田川と西谷田川沿いには田園風景が広がっている。この田園風景は昔、より広くこの地域に広がっていて、中心地（図 2 黒丸）を囲っていた。しかし現在では、区画整理された現代的な開発が多く見られ、みどりの駅の開業に伴う形でその流れ

は加速しているようである（図 2,図 3 赤丸）。この自然発生的な要因の強い地区と開発による計画的な要因が強い地区の混在がみられるのが一つ特徴である。



図 2 谷田部市街地（筆者加筆）

出典：国土地理院



図 3 1960年代の谷田部市街地（筆者加筆）

出典：国土地理院撮影 航空写真

谷田部の土地利用について明らかに転換期といえるのは研究学園都市構想である。研究学園都市の計画時には商工業の活性化、また道路整備や団地の建設など急激な都市化がなされ、人々の生活も大きく変わることとなり、高速道路の開通したところには空間的広がり大きく変化していた。特にこのころは工場の進出が進められたことも伴い多くの農地・山林が売買された。地価も急激に上がるなどしたことで新たな開発が行われることとなった。

## 5.3. 他地域とのつながりから見える中心性

谷田部は前述した通り交通の結節点として栄え、商業発展がなされた町である。実際にそれが見てとれるのが大正期に建てられた獣霊碑である。これはこの市街地の活況にかかわる人々の哀悼の念が刻まれた貴重な遺産である。筑波郡だけでなく、様々な地方からも多くの寄付が寄せられたことが

わかり、多方面から繁栄のために恩恵を受けていたようである。この商店街は長い間谷田部における商業の中核を担ってきた場所であり、それが多くの他地域による作用があって存在していたことが分かる。

また 1955 年時の谷田部町への合併というのはほとんど旧谷田部町への吸収合併だったと捉えられていたようである。実際に他 4 村からは合併に対する不満の声も上がっていたようであり、『茨城県市町村合併史』には「谷田部町は半商半農の町であるが、郡内政治・経済・文化の中核を担っており他の各村はいずれも純農村で谷田部町と密接な関係があり…」と記されている。現在の様子からは中心地であったように見えないが確かに谷田部市街地は周辺の中核を担い、人々の重要な場所であったようである。

## 6. インタビュー調査

谷田部商店街でのインタビューを行って分かったことをまとめる。

### 6.1. 玉川堂

・衰退と共に商店街では跡継ぎ問題が起こっていたが、若者の多くはサラリーマンとして谷田部外で職に就くようになった。

### 6.2. スドウ酒屋

・商店街の衰退は庁舎がなくなったことで更に進んだ。

・商店街の道路の交通量が多いが歩行者は非常に少ない。

・現在は谷田部商店街の店舗だけでなく、研究学園などのつくばの中心地へと支店を置いている。

## 7. これからの課題・展望

フィールドワークを行い、またいくつかの文献、地図を見たことで今後の調査の課題が見つかった。商店街などの主要地域を回りインタビューを行ったが、実際に研究学園都市構想やそれ以前の谷田部について生の声を聞くことはできなかった。そ

して地図をさらに収集し分析することで道路関係から土地の変容を考えることも必要であると感じる。

この先、キーとなる時期を考慮し、その軸の前後で人々の暮らしや心理の変化を知ることで土地利用の変容が深く分かるようになり、考察に説得性を持たせられるようになるのではないかと考える。周辺地域との関係なども考慮して谷田部の実態、歴史を考察していきたい。

## 参考文献

- 1) 谷田部の歴史編さん委員会,『谷田部の歴史』,谷田部町教育委員会,1975
- 2) 谷田部市街地活性化協議会,『歩いて発見。谷田部街道めぐり 歴史編』,2021
- 3) 藤沢官兵衛,『勘翁自伝：八十五歳のうは言』,勘翁自伝刊行委員会,1990
- 4) 茨城県総務部地方課,『茨城県市町村合併史』,茨城県総務部地方課,1958